

宿泊している宮城県蔵王町は、西側にある山形県と隣接する県境の町です。東北の日本海側にある県と太平洋側にある県の境界から海までの距離は、ほとんどの場所で100km以上あるのですが、名取市のある宮城県の牡鹿半島南部は、海岸部が内陸側へ湾曲する地形になっているので、蔵王町から太平洋沿岸の名取市まではおよそ50kmという位置関係にあります。こうした地理的好条件もあり、ホテルから名取市閑上地区までは、途中で休憩を挟んで90分足らずで到着することができました。

名取市閑上地区には「閑上の記憶」という施設があり、「東日本大震災」の被災状況と震災で得た教訓を後世に伝えるための活動をしています。ホテルからバスで移動中は「閑上の記憶」で制作したDVDを視聴し、現地に到着してからは「閑上の記憶」の方に名取市閑上地区を案内していただきました。

「閑上の記憶」では、震災当日のことだけでなく、震災発生前に閑上地区の住民が津波に対して抱いていた「思い込み」について話がありました。津波に対しては正直なところ、楽観的であったようです。「牡鹿半島より南には津波は来ない」という思い込みがあり、これは過去150年間、被害をもたらすような津波が牡鹿半島より南に到達していないという事実によっていたということです。

現在から過去150年を振り返ると、「明治三陸津波」（1896年／明治29年）、「昭和三陸津波」（1933年／昭和8年）、「チリ地震津波」（1960年／昭和35年）により、牡鹿半島北部の三陸海岸では大きな被害が発生していますが、牡鹿半島南部では被害がなかったということです。

名取市閑上地区では、仮に津波が来たとしても4m以下の高さであれば、海側にある「貞山（ていざん）運河」を越えてくることはないと思われていて、「津波警報（4m）」が伝えられても、全く危険を感じなかったそうです。その後、警報レベルが引き上げられ、「津波警報（6m）」でも危機感はなかったものの、「津波警報（10m）」の時点で恐怖を感じ、ようやく避難を開始したそうです。

避難方法の違いによって、人々の運命も変わりました。事故（地震によってトラックの積載物が落下）の影響や、停電で交通信号が機能していなかったこともあり、自動車を使っていた人は交通渋滞に巻き込まれ、避難が間に合いませんでした。語り部の方は徒歩で避難したために難を逃れることができたのですが、あの時なぜ、「徒歩で避難しよう」と声をかけることができなかったのか、後悔の念は今も消えていないということです。



「閑上の記憶」



「閑上の記憶」にて

「閑上の記憶」のすぐ近くに「閑上中学校」があります。正確には、閑上中学校は別の場所に移転しているため「旧閑上中学校」とすべきところですが、ここでは「閑上中学校」と記載いたします。

「閑上中学校」正門前の道路には、津波でなぎ倒されたガードレールが今も残っています。掲揚台は傾いたままです。正門から入ってすぐのところに、犠牲になった当時の中学生の慰霊碑があります。震災が発生した3月11日は「閑上中学校」の卒業式であったため、犠牲になった中学生は卒業式が自分たちの命日になってしまいました。彼らは現在の高校生とほぼ同じ世代の人間です。私たちも含め、誰にとっても当然のようにやってくるはずの「明日」という日が、犠牲になった中学生からは突然に奪われてしまったという現実が迫ってきました。

「今日という日は、犠牲になった人たちが何としても生きてかった一日である。」

改めて、今を大切に一生懸命に生きることの重要さを痛感しました。

通常、「閑上中学校」の校舎内へ立ち入ることはできないのですが、今回は特別に内部を見せていただくことができました。1階から案内していただいたのですが、校舎内の壁には津波によって付着した泥が残っていました。私が初めて被災地を訪れたのは、震災発生から1年が経過した時期でしたが、壁などに残る津波の痕跡を見たことがありません。震災発生直後はあらゆる場所で見られたのですが、雨などによって間もなく消えてしまったようです。「あの日」から4年近くが経過しようとしているこの時期にさえ見られたというのは、非常に貴重なことだと思います。

「あの日」は閑上中学校の卒業式であったため、黒板には「卒業」に関する記載がありました。同時に、震災後に「閑上中学校」を訪れた人々が残したメッセージも残されていました。震災のために移転を余儀なくされた閑上中学校ですが、「閑上中学校」の校舎内を見ると、各階のトイレや教室のロッカーは改修されたばかりの非常に状態がいいものでした。「明日」が当然のようにやって来ること、何十年経過しようとも閑上中学校がその場所にあり続けることを誰もが信じて疑うことのなかった矢先に発生した「東日本大震災」であることを、こうしたところからも感じました。



傾いたままの掲揚台 [「閑上中学校」正門付近]



「閑上中学校」の時計は「14時46分」を指している



表情も自然と真剣なものになります



改修されたばかりの手洗い場



校舎内の壁には津波の痕跡が残っている



かつての商店街を通過して「日和山」へ

名取市閑上地区にある「日和山（ひよりやま）」も訪れました。人の手によって作られた小高い丘なのですが、日和山からの景観は360°が津波の被災地です。日和山の近くには「東日本大震災慰霊碑」があり、全員で黙祷をささげました。慰霊碑のモニユメントの高さは、この地での津波の高さを示しているということです。あまりにも想像を絶する自然現象であるため、被災地を何度訪れても、そのような恐ろしい津波が発生したということを実感することが私には難しいです。



「日和山」



「日和山」からの見る閑上地区



沿岸部で建設が進む防潮堤 [「日和山」より]



語り部の方が熱心に案内してくれました



訪れるたびに目にする折れたままの道路標識



閑上地区の「東日本大震災慰霊碑」

※モニユメントの高さで津波が迫ってきました

話は戻りますが、「閑上中学校」の正門を入ってすぐのところ、犠牲になった中学生の母親が中心になって建立した慰霊碑があり、ここでも全員で祈りを捧げ、犠牲者の冥福を祈りました。昨年春に慰霊碑のそばにチューリップの球根を植えたところ、14輪の花が一斉に咲いたそうです。「14」という数字は、津波で犠牲になった閑上中学校の生徒の数です。植えた球根の数は14ではなかったのに、亡くなった中学生と同じ数のチューリップが仲良く咲き揃ったことは、偶然ではなく、奇跡としかいえない、不思議な出来事だったと語り部の方が話していました。さらには、小学生も1人の児童が犠牲になっているのですが、14輪の花が咲いてしばらくして、少し背の低い、小さなチューリップが咲いたそうです。